

現代ダイダラボッチ考

～巨人譚が成立しない現代における教育的役割～

高橋正弘

人間環境学科 教授
専門分野：環境教育、意識啓発

キーワード：民俗学、環境教育、柳田国男、巨人譚、ダイダラボッチ

1 はじめに

民俗譚の中に、いわゆる巨人譚と呼ばれる一群が存在する。巨人譚はさまざまなバリエーションを見せつつ、その中心をなすのが「ダイダラボッチ」である。

ダイダラボッチが登場する民俗譚で顕著なものは、ダイダラボッチなどと呼ばれる恐るべき大きさの巨人が、ある地方を歩いたことによって、その巨体を支えている足によって足跡が窪地となって残り、後日そこに水が溜まり、沼地のようになって足形が残されている、というものである。つまり巨人の足跡という痕跡をめぐる口碑である。ある土地におけるひとつの地理的形狀の由来を巨人伝説に当てはめたものであり、その話では人間の力を大きく超えた巨大な力が働いたために形成された地形があると見ている。近代ではもはや非科学的な説明であるが、証拠となる足型の湿地が存在するため、説明としては一応成立していたと考えることができる。

子ども時代を関東の一地域過ごした筆者自身にとっても、この「ダイダラボッチ」伝説は折に触れて耳に入ってきたものであった。しかし子ども時代を過ごしていたのが高度経済成長を過ぎたあたりであったため、それが全くの「伝説」であることは、子どもながらに聞いた瞬間からはっきりと理解していた。つまりこの世界には、現在も少し前の過去も、さらにずっと以前の過去にも、巨人などは存在しなかったし、そのような巨人の足跡と呼ばれるものは自然に形成されたものである、ということは、だれに教えられなくても子どもながらに理解することはそれほど困難なことではなかったように記憶している。

ダイダラボッチの伝説がかつて存在し、いま文献等で残されそれを見ることができるといことを、現代に生きる我々は果たしてどのように受け止めるべきであるか。ダイダラボッチをめぐる巨人譚は現代にどのような価値を持つのであるか。そして巨人譚は現在の環境教育に活かすことが果たしてできるものなのだろうか。これらの疑問について考察を試みてみるのが、本稿の目的である。

2 柳田国男のダイダラボッチに関する記載

ダイダラボッチの伝説に取り組んだのは、民俗学を打ち立てた柳田国男である。昭和二年に発表された論考「ダイダラボッチの足跡」の中で、柳田は一連の巨人譚を扱っている。この中で柳田は、ダイダラボッチに対して極めて柔和な目を向けていることがわかる。かつて「山人」に対しては、南方熊楠への書簡の中で「今モ存ス」と、その存在を信じ、擁護をしていた態度と異なり、そもそもダイダラボッチの存在には否定的でありつつ、

その民俗譚を可能な限り解き明かそうと扱っているのである。柳田の豊かな想像力をしても、ダイダラボッチを実存したものと理解することは当初からできなかったと思われる。

柳田は、貴族院書記官長の職を1912年の12月に辞めた後の、おそらく1913年頃に、東京世田谷の代田付近を巡検した自身の経験について触れつつ、このダイダラボッチの伝承に民俗学的に取り組もうとした奮闘を見ることができる。

甲州街道は四谷新町のさき、笹塚の手前にダイタ橋がある。大多(だいた)ぼっちが架けたる橋のよしいひ傳ふ云々とある。即ち現在の京王電車線、代田橋の停留所と正に一致するのだが、あのあたりには後世の玉川上水以上に、大きな川はないのだから、巨人の偉績としては甚だ振はぬものである。しかし村の名の代田(だいた)は偶然でないと思ふ上に、現に大きな足跡が残っているのだから争はれぬ。私は到底その舊跡に對して冷淡であり得なかった。七年前に役人を罷めて氣楽になったとき、早速日をトしてこれを尋ねて見たのである。ダイタの橋から東南へ五六町、その頃はまだ畠中であつた道路の左手に接して、長さ約百間もあるかと思ふ右片足の跡が一つ、爪先あがりに土深く踏みつけてある、と言ってもよいやうな窪地があつた。内側は竹と杉若木の混植で、水が流れると見えて中央が薬研になって居り、踵の處まで下るとわづかな平地に、小さな堂が建つてその傍に湧き水の池があつた。即ちもう人は忘れたかも知れぬが、村の名のダイタは確かにこの足跡に基いたものである。

柳田が「冷淡であり得なかった」としたダイダラボッチの足跡の様子はこのようなもので、読者にも想像することができるように記述されている。特に窪地の形態や土地の形状、そしてその当時の環境と堂を設置した住民の信仰の存在など、情報が詳しく書き込まれている。

ところで、柳田が実際に踏査した代田の足跡は、現在では全く痕跡も残さない状態になっている。航空写真¹⁾から確認すると、現在の「世田谷区立下北沢小学校」の脇には、1936年の航空写真では池を形成している足跡がかなり明瞭に見て取ることができる(図1)。しかし1944年の写真からは、すでに住居が建ちつつあり、沼地がほとんどわからなくなっている(図2)。戦中期から宅地化が進行したと思われ、現在ではマンション等が建っているのがわかり、横を流れていた細い川も埋め垂れられていてもはや全く見られない(図3)。



図1 1936年の代田地区（学校脇の水路横の円内に足跡形状の沼地が見える）



図2 1944年の代田地区（円内の沼地はすでにかなり不明瞭）



図3 2018年の代田地区（水路は埋め立てられ円内に湿地は全く存在しない）

柳田が訪問した1913年頃から1936年頃までは足跡とされる沼地は残されていたが、1944年頃にそれはほぼ失われていた。ということは、今日に至る年月の中で、昔日の環境とは全く異なる風景にこの近辺が変わってしまっていることがわかる。日本の東京という地域に特有かもしれないが、時間をかけた開発圧力の結果であることもわかる。

ダイダラボッチの伝説は関東に多く存在すると柳田が指摘するとおり、他の地域、例えば埼玉県川越市にも見出すことができる。しかしその足跡となると、今日では代田付近のものと同様かなり心もとない。川越市内には笠幡地区の一面にダイダラボッチの足跡があるということであるが、2019年1月に実施した筆者による踏査によると、当該場所は現在竹藪と荒地になっていて、また最近建設されたと思われる住居が複数建っており、土地としては確かに低い場所ではあったが、窪地の痕跡すら見当たらない状況であった。（図4）

これらのことから、現代においてダイダラボッチの足跡を見ようとしても、それはもう失われ存在していないものが多いことになる。このことについて、例えば椀貸伝説は、その当時からすでに失われた過去の生活経験が語られている、という形式になっている（高橋 2014）が、ダイダラボッチの巨人譚では、その話が語られるようになった時点では巨人の痕跡である大きな足跡がたしかに存在していたという違いが見られる。しかし現代に至るまでに、宅地開発等の理由の積み重なりにより、今日では足跡はほとんど残されていないのである。

3 現代エンターテインメント作品へのダイダラボッチの受容

巨人譚が誕生した過去と現代を比較すると、現代ではダイダラボッチの足跡が失われているということから、そのような現代にダイダラボッチはどのように扱われているか、ということを見るのが重要となる。「現代」と「ダイダラボッチ」という結び付きにくい二者ではあるが、それでも多くの人気が気付くのは、現代のエンターテインメント作品の中にいまなお巨人が多く登場してくる、ということであろう。以下、巨人が登場する3つの作品を取り上げてみる。

1984年に公開された宮崎駿監督による「風の谷のナウシカ」には、巨神兵と呼ばれるキャラクターで、巨人が出現する。この巨神兵は作品中で、世界の破壊を司る絶対悪として描かれており、そもそもは過去に実在した存在であったとされており、その巨神兵を復活させるという展開の中で登場する。一瞬だけ復活した巨神兵は、核兵器を思わせるような強力な攻撃で破壊行為を見せた後に自壊してしまう。つまり過去の栄光はあくまで過去のものであって、過去の遺物では現在の世界では戦いつづけることができない、というメタファーが巨人の復活と自壊のシーンこめられている、と見ることができる。いずれにせよ、現代のアニメ作品の中で、一瞬出現する悪の存在として巨人が描かれているのが、風の谷のナウシカである。

また、「もののけ姫」という作品にダイダラボッチが出てくる。これも宮崎駿監督による作品で1997年の公開だから、風の谷のナウシカよりやや最近の作品であって、興行収入も大きかったエンターテインメント作品のひとつである。このもののけ姫には、「シシ神」と呼ばれる生命を左右できる超自然的な存在が登場するが、それが夜間にはダイダラボッチに変化している。シシ神からダイダラボッチへの変化は、何らかの他の民俗譚に由来するというよりも、あくまでも宮崎による創作であろう。なぜならダイダラボッチの「ボッチ」の語源が「法師」であって、神と法師とは、土着信仰の中で形成された神という存在と、外国から輸入された宗教である仏教の修行をする人物としての法師という存在とでは、両者に性質の違いがあるからである。つまり両者は当然、宗教的な位相が異なるのである。よって神から法師への変身は、この作品のみにみられるべき現代的なフィクション、として捉えることができる。また喜田(2008)のいう「往々にして賤しい身分と認められたものにくっつけて呼ばれた」法師と、聖性をまとっている神とでは、過去の日本人であればとてもメタモルフォーゼするという発想はできなかった存在同士であろうと思われる。

つまり現代の巨人譚は、かなり自由な発想で取り扱ったり創作に用いたりすることのできる素材のひとつになっており、そのような作品に、人間が存在する以前にあったと

いう超自然観を見ることはできない。もののけ姫ではかろうじてダイダラボッチがシン神の首を取り返そうとする際に、人間にはとてもかなわないような力を繰り出す様子が描かれている。これは巨神兵という巨人と対峙する人間という構図としてはナウシカと同じである。そしてそこには、ダイダラボッチが自然地理を作り上げてきたという理解は特に具体的には示されておらず、あくまで人間と対立する役悪を担う存在、として描かれていることに注目すべきである。

漫画として発表されている諫山創による「進撃の巨人」は、城壁の中で生活している人間が、壁の外に出現する巨人と人類の存続をかけて闘う、というストーリーで、当該世界についての多くの情報が不明なまま、大小さまざまな巨人との闘いが描かれ続けている。このストーリーでは巨人は圧倒的な強さを有していて、それらほとんどが人類の敵として描かれていることが特徴である。現実には巨人が存在し、それとのコミュニケーションができなければ、おそらく人類は恐怖を感じるであろうということが容易に想起できる作品として、2019年時点ではまだ完結していない。謎がまだ明かされていない点も多く、作品世界の全容がまだ見えないため、巨人への評価をすることは現時点では難しい。しかしながら、現在も順次公開中のエンターテインメント作品の中で、巨人を扱っている点で、以降も注目することが必要である。

以上の3作品のみを取り上げたが、現代のエンターテインメント作品中では、ダイダラボッチのような巨人譚が孕む意味世界が、過去において民俗譚として語られた本来のものから大きく離れてしまい、ただ物語として消費されるもの、具体的には巨人は恐怖の対象であり、それを克服する人間賛美の作品群として提供されるものとなっていることに気がつかされる。巨人が人間の知恵を超えた存在としていくつかの地理を築いていったことなど、過去の巨人の栄光については現代ではもはや全く理解されておらず、人間と対立する存在として巨人が登場する世界観がエンターテインメントの中で確立している。

なお、巨人が人間と対立する存在であるとされていることは、現代の特色であると考えられる。例えば沖縄県与那国町には、1500年代のサンアイ・イソバと呼ばれる巨体で剛力の持ち主であった女酋長の伝説が残されており、そのサンアイ・イソバは政治をよくし、島民から尊崇を集めたと言われている(図5)。この巨人は悪や対立する相手方ということではなく、むしろ住民たちから尊敬を集めていたということであり、古来のダイダラボッチと同じ存在であろうと思われる。そのことから、現代において巨人の扱いが過去のそれと大きく異なってきたことがわかる。



図4 ダイダラボッチの足跡とされる場所（埼玉県川越市笠幡地区、筆者撮影）

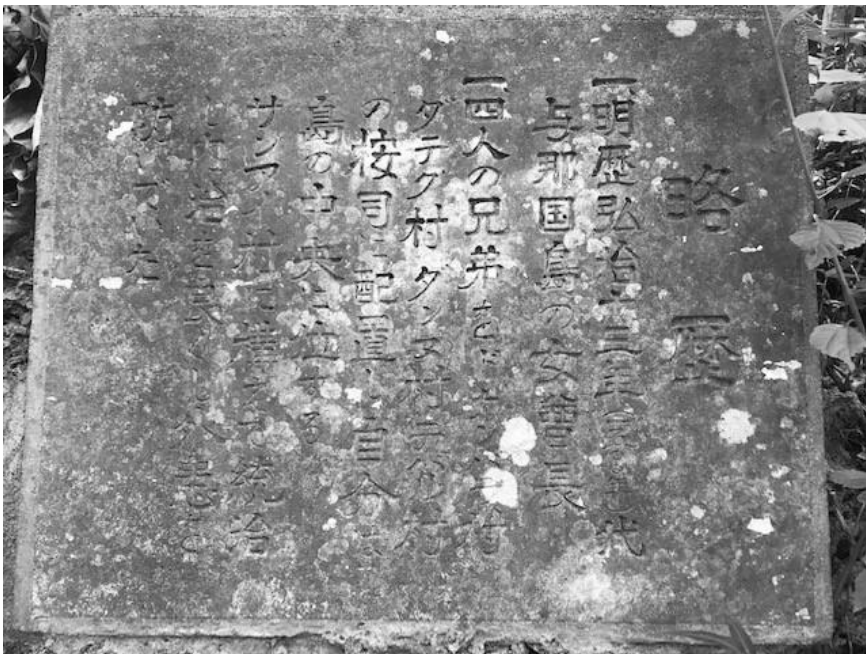


図5 サンアイ・イソバの略歴の碑（沖縄県与那国町ティンダバナタ、筆者撮影）

4 現代におけるダイダラボッチの理解

2 で見たとおり、足型を残している沼池の多くは現代には消滅してしまっていて、いまどこでも見られるというものではない。もちろん現代にも残されている沼地はあって、それが巨人の足跡であるとされている場所も存在することはする。しかし柳田が実際に足を運んで見て書いた紀行文を残した代田の沼地は、残されていない。今日ではそこに足跡とされた沼地があったことすら知らない住民がほとんどであろう。そのことを現代の我々はどうに受け取るべきなのであろうか。

かつての日本人はプリミティブな自然認識の段階で、当時の知識や認識で説明することが不可能な事象を何とか説明するために、過去に巨人が存在したのだ、ということ語り、それが語り継がれることで集団的な思考を育て上げてきたのである。そして現在はそのような自然認識が古いものであり、科学的な自然認識を把持する現代人にとっては当然ながらダイダラボッチの話は虚構でしかなく、そういう状態であるならばもはやダイダラボッチのような巨人は、アニメ作品などで消費されるだけの存在、ということになる。この考え方は一面で正しいものであろう。

しかしながら、柳田のダイダラボッチへの関心の中で、伝説の進化のプロセスを提示する可能性がある、と喝破していることに注目することができる。日常の中で突発的な何らかの要因によって自然地理が変化する。そうした場合の民衆の理解の中で、人知を超えた存在を考える、というのが柳田の見立てである。具体的には、地下水の流れの変化によって、湧き水が出てくる場所が変化し、そのことをダイダラボッチの歩行に結び付けて伝説を考えた当時の人々の科学的自然理解の痕跡を、柳田はこれらの口碑に見出しているのである。

したがって、ダイダラボッチの足跡の現代的な意味については、それが単なる語りや伝説であって、今日では意味をなさない処理することができる一方で、自然環境管理の方向性を定める際に、民俗譚によって共通認識の形成を地域で図ったもの、と解釈することも可能である。先に引用した柳田の記述の中に、代田の足跡の脇に堂があったということから、そもそも堂を設けて水資源を祀ることは、コミュニティの何らかの共通した意思が投影されていると考えることができるからである。つまりダイダラボッチの伝承が残されている土地において、過去に苦労して水資源管理が行われたということ、民俗譚の存在から知ることができる、ということである。

ダイダラボッチの伝説と椀貸伝説との決定的違いは、ダイダラボッチの足跡とみなされる沼地はもともと実際に存在したが、椀貸伝説ではそもそも椀を貸す機能が沼地から失われてしまったところから話が始まっていることである。実際にあった沼地をコミュ

ニティで管理する際に、その背景として以前椀貸しが行われていた場所である、という説明と、これはダイダラボッチの足跡であるという説明とでは、どちらが保全利用の心理的な機能が大きいかといえ、堂を建てて水資源管理を地域の信仰にまで昇華させているダイダラボッチ伝承の方が、より大きな機能を果たしてきたと考えることができる。

5 環境教育の素材としての巨人譚の可能性

以上でみてきた通り、自然地理を説明する際の旧来型の自然認識は、今日の自然科学の説明としてはもはや間違っていると共通で理解されており、その点では現代の科学が巨人譚をはるかに乗り越えてしまっている、正しい認識を与えるものとしての巨人譚というものは妥当ではない。またそもそも人間界に大男は一定数いたとしても、それをはるかに凌駕するサイズの巨人は現実には存在しない。そのことが常識となっている今日、自然地理の起源としてダイダラボッチを捉える、という理解はすでに支持を受けないことは明らかである。それならば、巨人譚は今日では教育利用ができないものなのであろうか。この点について最後に少し考えてみたい。

幼児教育の場面を想定してみれば、たとえ虚構が加わっていても健全な心身の発達という目標に沿った幼児教育などの素材として扱う可能性についてはどうであろうか。昔話としての面白さがあるか、それとも幼児が社会生活に参加する際のルールを示すものであるか、などといった視点が容易に見いだせることが幼児教育の教材に求められるとすれば、そのような観点に基づけば現代でも巨人譚は幼児教育で一定の役割を与えられることは可能であろう。巨人が単なる悪でなく、何らかの形で自然地理にも力を加えることができたという存在であることを示すことは、幼児期の教育教材としてもなお有用であると考えられる²⁾。

さらに踏み込んで、巨人譚は現代において、幼児教育としての役割を超えて、環境教育の材料や素材にはなり得るであろうか。もしくは巨人譚は現代においては環境教育に活用されることはない存在なのであろうか。それについては、巨人譚の積極的な活用は、やはり環境認識の一部でも正確に示すことができないため、そのような正確性の観点からは役割を終えてしまっている。しかしあえて役割があるとしてそれをあげるとすれば、自然地理の成り立ちを説明する際に、過去においてはそのような自然認識がなされていたということをトレースすることができる素材としての有用性である。必要性という点ではあまりにスコープの小さな教材ということになるだろうが、巨人譚やダイダラボッチ伝説が過去のどこかの時点においてそれなりに一定の役割を果たしたということを取り上げれば、我々の認識の変遷を説明することには役立つ。しかも今日の科学はその認識を

大きく超えて、はるかに複雑で合理的な説明を準備することができるわけであるから、巨人譚の説明をプリミティブなものとして敢えて取り上げることによって、現代科学の学問体系の重要性を反転させて見せることができるのである。

また、環境教育的意義として、ダイダラボッチの伝説が指し示す地域の環境が、現在の環境と全く異なる過去のものを想像する手がかりとして有用であるのだから、その点で活用するということもあり得る。特に東京およびその郊外で、本来は身近に存在していた湿地がほとんど失われてきたということで、湿地の生態系がもはや取り返しのつかないほどに破壊されてきているということを知る材料として、ダイダラボッチの話を受け取る可能性はもちろんあるであろう。近代以降の土地利用において、政策動向によって必ずしも利用形態や景観が持続しない場が生じる、ということを理解する学習材として、巨人譚によって語られた環境と現代のそれとの違いから、さまざまなことを考える教育活動を準備することができるであろう。

補注

- 1) 1936年と1944年の航空写真は、国土地理院が運営する「地図・空中写真閲覧サービス」 [<https://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do#1>] を、また2018年のものはグーグルマップを利用した(2019年5月5日閲覧)。
- 2) 例えば幼児期の教材や絵本等の中には動物がキャラクター化されたものが多く出てくる。それらの中で、しかし熊はやはり人間にとっては依然として危険な野生動物であるし、象などはアジアやアフリカなどの地域、つまり海外に生息する日本には本来存在しない動物であって、これらを受すべきキャラクター扱っている幼児期の書籍等では、おそらく正確な自然認識を獲得するには適切ではないかもしれないが、それでも生物多様性の考え方の萌芽を身に付ける、という観点から現状で選択され利用されているものである。

文献

- 喜田貞吉(2008) 差別の根源を考える、河出書房新社(ただし初出は1920年の「民族と歴史」1～7号上の模様)
- 高橋正弘(2015) 環境教育への民俗譚の援用に関する小考 大正大学人間環境論集、第2号、1-14
- 柳田国男(1928) ダイダラボッチの足跡(底本として定本柳田国男集第五巻/柳田国男全集6によった)